

採血・点滴処置時に遊びを取り入れて ～2歳児の情緒・行動の変化を検討する～

清水 紀子 奥洞 真智子 塚腰 綾乃

高山赤十字病院看護部（1 病棟 3 階）

抄 録：当病棟における児の採血及び点滴処置時は、抑制帯を使用し押さえながら実施しており児は泣き叫び看護師は悲しい気持ちで行っている現状がある。近年子どもの権利に基づき、3歳以上のプレパレーションの研究が多々行われている。今回当病棟においては3歳未満の児が半数以上を占めている為、3歳未満の言語理解や自己表現が不十分な2歳児を研究対象とした。ごっこ遊びを取り入れ処置環境を見直したところ、情緒・行動に効果的な変化があった。

検索用語：2歳児、採血・点滴処置、遊び、プレパレーション

はじめに

当病棟小児科においては、3歳未満の入院が半数以上を占めている。処置時は、安全面を重視して抑制帯を使用し処置を行っている。しかし、児はよくわからないまま処置が始まるので泣き叫び、看護師も悲しい気持ちで処置を行っているのが現状である。3歳未満の児は母親との共生が重い意味を持ち、言語の理解や自己表現が不十分であるという特徴を持つ。このような発達段階を踏まえ少しでも不安や恐怖を与えないで処置を行う為にはどうしたらよいのか悩み考えた。そこで、3歳未満の児の中でも2歳児は言葉を獲得し、自己主張がはっきりし、集団行動を強く求め、つもり遊びから初歩的なごっこ遊びが成立する時期であることに注目した。ごっこ遊びを含む遊びを取り入れ、今までの処置環境を見直し遊びの延長として処置を行うことで、情緒や行動にどのような変化が現れるのかを検討したので報告する。

用語の定義

抑制帯：

検査・処置時に児の安全と保護を目的とした固定ベルトを使用すること

遊 び：

人形を利用してのごっこ遊び、アニメの音楽を流す、処置室内をキャラクターポスターなどで装飾

すること

処 置：

採血、点滴ルートの挿入、点滴挿入部の再固定

プレパレーション：

認知・発達段階に応じた方法で、検査・処置に関する情報を遊びを通して伝え、児の心の準備をさせ頑張りを引き出すこと

I 目 的

2歳児の処置前に遊びを取り入れた場合の児の情緒、行動の変化を明らかにし検討する

II 方 法

1. 調査期間：2011年10月～2011年12月
2. 調査方法：看護師の客観的評価（評価用紙を独自に作成）
3. 研究デザイン：質的研究
4. 研究対象児：正常な発達段階の成長過程にある2歳児（入院直後の処置は除く）
5. 研究施行者：看護師（看護研究メンバー3名を中心とした病棟看護師全員）
6. 進め方
 - 1) 調査開始前に病棟看護師に方法の説明をする
 - 2) 処置室の環境の改善（模様替え）
 - 3) 母児へのアプローチ
 - (1) 研究対象児の母親へ研究の主旨と協力を

依頼しビデオ撮影の同意書をとる

(2)前もって母から、好きな遊び・キャラクター・今までの検査・処置の経験、その時の様子、母の希望などを情報収集する。

(3)これらの情報を研究施行者で共有しプランを立てる

4)医師への協力を依頼(母の同席は母の希望と医師の了解を得た上で施行する)

5)処置前のごっこ遊び

(1)いつ:処置のある前日の夕方

(2)どこで:病室

(3)誰:研究施行者、研究対象児とその母親

(4)道具:人形、ごっこ遊びセット(注射器、作成した抑制帯)

(5)内容:児の機嫌を考慮しながらお医者さんごっこをする。母親に児と一緒に遊んでもらうように説明する。「明日チックンがあるよ」などとは言わない。

6)処置時(ビデオ撮影)

(1)看護師・医師はキャラクターのエプロンを着用し処置室に音楽をかける

(2)前日のごっこ遊びを説明した看護師が処置室へ誘導(人形持参)し処置を担当する

(3)処置後に頑張ったことを褒める

7. データ収集と分析方法

1)表情(フェイスケールを使用)、子供の言葉、態度・動作、母親の様子、看護師の対応、医師の対応を場面ごとにカテゴリー化できる表を作成する(各児1枚)

2)処置室へ向かう病室から帰室されるまでをビデオ撮影する

3)ビデオ映像を再生しながら上記1)の観察項目に沿って表に記録する

①ビデオは研究施行者3人で視聴する。又、アドバイザーとして病棟看護師にもビデオ視聴をしてもらい、アドバイスをもらう

4)2歳児の特徴を踏まえプレパレーションの評価を基準に児の行動をカテゴリー化する

8. 倫理的配慮

研究の趣旨と方法について家族に説明し同意書を得た。その際同意が得られなくても不利益が生じないこと、拒否する事は自由意志であることを説明した。また、得られたデータは研究以外では

使用しないことを説明した。ビデオ撮影と同意書に関し当院倫理委員会の承認を得た。

Ⅲ 結 果

1. 7患児の情緒・行動の変化について(表1参照)

患児A:母親が同席した処置であり、人形のごっこ遊びから処置後まで全く抵抗・啼泣せず体動がなかった事例である。ごっこ遊びには気が乗らない様子であったが、母親、看護師、医師の声かけや処置室の環境に終始圧倒されている様子であった。

患児B:処置室の装飾や、雰囲気に興味津々で楽しんで処置が出来た事例。入院時に処置室に入室した経験があり、処置室の装飾やメリーモビル、人形をととても気に入っていた。ごっこ遊びにはあまり興味がなさそうであったが、処置室に流れている音楽で歌って踊ってなかなか処置を開始できなかった。処置中は泣いていたが立ち直りも早く、終始楽しい雰囲気ですべて処置を終えた。

患児C:ごっこ遊びには興味を示さなかった。抑制帯を使用せずに、母に抱かれて処置ができた事例である。キョロキョロしていたが泣かずに動かずに処置を終えた。

患児D:ごっこ遊びはあまり興味がなさそうであったが、母親、看護師に勧められるうちに興味を示してきた。処置中は泣き叫んでいたが、体動はなく、処置後は人形を抱きしめすぐに泣きやんだ。

患児E:アレルギー体質のため処置経験も多く、看護師におびえていた。ごっこ遊びもしなかった。採血に母親が同席したが、終始泣いていた。体動はなかった。

患児F:ごっこ遊びは興味を示さず、無言のままだった。処置室へは人形を2体持ち母親も同席した。入院してから様々な処置を受けていたため恐怖心が強く、処置中も泣き叫び暴れていた。処置後は人形を抱きしめ泣きやんだ。

患児G:ごっこ遊びに興味を示し、唯一人形に抑制帯を巻いて遊ぶことができた。児も処

表1 7児の情緒・行動の変化

	ケアモデルとごっこ遊び (前日)	処置前 (病室～処置室入室)	処置中 (入室～処置終了)	処置後 (処置終了～退室)
A 2歳4ヶ月 男 入院4日目 母同席あり 血液検査(穿刺1回のみ)				
表情				
言葉	終始無言 説明後「シマジロウ」とつぶやく	無言	無言	痛くなかったよ シマちゃん...
態度 動作	ボーっとして看護師や母に圧倒されている。キョトンとしている。人形には興味を示さないが、注射器や聴診器をかまってる遊ぶ。	やや不安な表情でキョトンとしている。カメラ見ている	おとなしくされるがままに抑制帯を巻かれる。目をキョロキョロさせる。指先も動かさないくらい、体動なし。	母に抱かれ笑顔 得意気
B 2歳2ヶ月 女 入院3日目 母同席なし 血液検査(穿刺1回のみ)				
表情				
言葉	プーさん、プーさん くるくる～くるくる～、ちょきん	くるくる行く～	散歩の歌をうたう。 うわ～うわ～と指をさす	プーさん、アンパンマン ミッフィー、スヌーピーわあい
態度 動作	処置室の人形や装飾が気に入りおはしゃぎ。注射器・抑制帯には興味なし	看護師に対しだっこして手を広げる。あっちあっちと指をさして向かう。	CDに合わせて歌い踊る。看護師のエプロンにも興味深々。抑制すると少し泣き、採血も泣く。	すぐに泣きやむ。処置が終わっても部屋から出たがらない。しぶしぶ帰る。
C 2歳6ヶ月 男 入院4日目 母同席あり 点滴処置のみ				
表情				
言葉	無言	いやーいやー！！ ママだけ行って！！	無言	
態度 動作	最初だけ遊び、以後は興味に移った	部屋の中をキョロキョロみている	不安な表情だったが、母に素直に抱かれ、動かず処置を受ける。キョロキョロしている。	ボーっとしており、笑顔で部屋へ戻る
D 2歳7ヶ月 男 入院5日目 母同席なし 血液検査(穿刺1回のみ)				
表情				
言葉	「ちゅくん」 「はい」と母にも遊びを進める。	いや...いや...いや... いたい、いたい	「おつかあ、おつかあー」 「ママーいたいー」	無言
態度 動作	キョトンとしていたが、勧められるとはさみ注射器を持って人形に注射する	人形と道具と一緒に持ち母に抱かれる。処置室に近づくと涙ぐむ。抵抗はなし。	横にすると泣き出す。抵抗はせずされるがまま。先生みて、注射器みて絶叫する。採血するところを見ている。	母にすぐ抱かれる。人形とおもちゃをぎゅっと握りしめる。
E 2歳1ヶ月 男 入院5日目 母同席あり 血液検査(穿刺1回のみ)				
表情				
言葉	無言	無言	お母さ～ん、お母さ～ん ママー	ママー
態度 動作	母にくっつき不安 人形にも興味を示さない	不安気、表情ひきつっている。素直にじっと抱っこされている。	母と離れると泣き、抑制帯で又泣く。採血時も泣く。体動なし。人形を時々見る。	泣きべそをかいており、母に抱かれキョロキョロしている。母にバイバイを促されバイバイする。
F 2歳1ヶ月 女 入院6日目 母同席あり 血液検査(穿刺1回のみ)				
表情				
言葉	無言	無言	ウーーン、ウーーン お母ちゃ～んいやーいやーあー――	無言
態度 動作	無表情、あまり興味なさそう	人形2体持って母に抱っこされる。母にしがみついている。	母にしがみついて離れない。強制的に抑制する。ベッド上でゴロゴロし必死に抵抗する。母の手を握って泣いている。	枕元の母をぐずりながら見つめ採血後の手をじっと見る。人形に助けを求めるかのように抱く。人形を握りしめ歩いて帰る。
G 2歳6ヶ月 女 入院6日目 母同席あり 血液検査(穿刺3回)				
表情				
言葉	くまちゃん好きー	いやーいやー	だっこだっこーいたいーいたいー いやーいやーあー――	えーんえーん 「ありがと」泣きながら
態度 動作	笑顔で、人形や抑制帯でお医者さんごっこをよここんで遊ぶ	抱っこされ、笑顔で来るが、処置室に入ったとたん泣き出す	なだめても横にさせられないくらい必死に抵抗し、泣き叫ぶ。人形に一瞬気をとられる。涙でぐしゃぐしゃ。	しばらく泣きやまず、同室したクマを探して握りしめて帰る

置に対して恐怖心を持っており、処置中は終始大泣きし暴れておりなかなか抑制ができなかった。処置後もしばらく泣きやまず、人形を握りしめて帰室した。

2. プレパレーションの評価を基準に児の情緒、行動をカテゴリー化(表2参照)

1) ごっこ遊び(人形でのシミュレーション)

人形と共に人形に使用する抑制帯を準備したが、抑制帯で遊ぶ児は1名であった。

おもちゃの注射器で遊ぶ・母親に誘導されて遊ぶ児は5名いた。全く遊ばなかった児は2名いた。

2) 処置室への誘導

母にしがみつきのながらも抵抗はせず5名が入

室した。6名の児は自分の気に入ったぬいぐるみを持参した。入室すると処置室の装飾やおもちゃに気をとられ、4名の児はキョロキョロとしていた。

3) 処置中

5名の母親が同席し傍らで声をかけ続けた。泣いた児は5名いたが動かずに処置を終えた児は4名いた。暴れた児は2名いて抑制して施行した。しかし、暴れたり泣いたりした児でもすぐに泣き止み、自分と同席した人形を抱き寄せる姿が見られた児は5名いた。点滴挿入部の再固定は母の膝に乗って抑制帯なしで1名が施行できた。

4) 処置後

笑顔を見せた児3名、お礼を言った児1名。し

表2. プレパレーションの構成要素 (数字は人数を示す)

プレパレーションの構成要素	評価項目	主だった子どもの言動	遊び	処置		
				前	中	後
児に正しい知識を提供する	ケアモデルでシミュレーションできたか	人形に注射する	5			
		人形に抑制帯巻く	1			
		全く遊ばなかった	2			
医療者と信頼関係を築く	不安や恐怖の軽減	処置室まで抵抗なく歩いてくる		5		
		「がんばる」と言える		0		
		選んだ人形の同席		6		
		処置室での笑顔			1	
		おもちゃに気を取られる			4	
		医師、看護師に気をとられる			3	
児に情緒表現の機会を与える	対処能力	泣く	0	4	5	1
		泣かない	7	3	2	6
		母親同室すると抑制帯なしでできた			1	
		暴れる			2	
		腕を動かさない			5	
		すぐに泣きやむ				4
		お礼を言う				1
	頑張った実感	笑顔をみせる				3
		「がんばった」と言える				0
		「がんばったね」にうなづく				0
		人形を抱きしめる				4

かし、頑張ったとはっきり答えることができた児はいなかった。

IV 考 察

1. 児に正しい知識を提供する

評価項目にケアモデルでシミュレーション出来たかを挙げた。7名全員ではないが人形に注射する・抑制帯を巻くなどの行動は見られた。2歳児期の遊び活動の最大の特徴は初歩的ごっこ遊びの成立である。と高浜¹⁾らは言っている。私たちは処置前にお医者さんごっこの遊びを取り入れることがプレパレーションの一環になるのではないかと考えた。私たちは前日のごっこ遊びは処置の説明としての要素は求めず、実際に自分が処置の現状に遭遇したときに人形と自分を重ね合わせ同じように頑張れるのではないかと推測していた。ごっこ遊びは2歳児の遊びの一環として捉えられたとは推測するが、明日自分も同じことをするのだというシミュレーションとしての作用はなかったと考えられる。2歳児の安全基地である母親が人形を受け入れごっこ遊びに関わっていたことや、看護師が前日より人形を持参し「看護師が明日(人形を)迎えにくる。～くんが(人形を)見ててあげてね」などと言ってコミュニケーションをとったこと、今日来た看護師が明日迎えに来るということが児との信頼関係を導くことに繋がったと考えられる。

2. 医療者と信頼関係を築く

処置室までは人形を持参し抵抗なく来た児が5名いた。これは前日来た看護師がいつもとは違う服装でキャラクターのエプロンをして迎えに来たことが児の気持ちの変化・安心感を招いたと考えられる。さらに処置室では、処置室の装飾やメリーモビル・音楽・処置室にある別のぬいぐるみなどに気をとられる児がいた。処置室の環境の改善は遊びの一環のなかで非常に重要な役割を果たしたと実感できる。2歳児にとってのプレパレーションは発達段階を考えると心理的準備をするというよりも処置中の気を紛らわせるような遊びの介入であるディストラクションや、母親が同席することは非常に有効的であった。今回のような、部屋から処置室までの流れを通して、個人を尊重し情

報収集を行い児のペースを守ったことは、医療者と信頼関係を築くことに繋がったと考えられる。

3. 情緒表現の機会を与える

2歳児でも、「泣かずに処置ができた」2名、「処置後にすぐに泣き止んだ」2名、「腕を動かさなかった」5名という結果は非常に注目すべき点である。2歳児にとって処置時に啼泣することは普通である。まだ言葉では自分の思いを十分に表現できないこの時期にとって自己表現の一つとして考えるならば啼泣は自然なことである。しかし、その場の状況に適応もしくは気をそらされたにしろ、対処能力の結果は児にとって成長の一つであり母親にとって快いことであった。また腕を動かさなかったということは、2歳児でもその場の母親や医療者の言葉を理解し状況を受け入れたのではないかと考える。頑張った実感は、自己表現が未熟であることや言葉の獲得が不十分な為に評価が難しい。2歳児にとって自分が頑張った実感はわからないのではないかと考える。わからないぶん、医療者や家族が児を肯定して認め伝えることが重要である。

今回この研究にてごっこ遊びを中心にプレパレーションを行ってみたが、患児との信頼関係を築くことが重要であることがわかった。しかし、介入時期と内容・場所・タイミングについては今後の課題である。

V 結 論

1. 2歳児の処置時に遊びを取り入れたことは情緒・行動に効果的な変化をもたらした。
2. 処置を実施する際には医療関係者との信頼関係を築くことが重要である。
3. プレパレーションの方法としては更なる検討が必要である。

おわりに

今回の研究により、たとえ言語理解が不十分な年齢の児であっても、一人の人間として尊重し、大人の都合に合わせるのではなく児に合わせることの大切さを痛感した。

また、初めてプレパレーションに関する研究を行ってみたが、他の看護師や医師も非常に興味を持ち参加してくれ協力的であった。今後は病棟内にプレパレーションへの関心が高まり、実施年齢を広げ、より浸透していくことを期待したい。

引用文献

- 1)高浜介二、他：年齢別保育講座 第3章2歳児保育の実際 ルック 2004、122-129

参考文献

- 1)湧水理恵他：日本の小児医療におけるプレパレーションの効果に関する文献的考察 日本小児看護学会誌 115(2)：82-89 2006

- 2)梶谷一美他：採血時のプレパレーションに子どもが選択できる方法を取り入れた効果 第40回日本看護学会論文集 小児看護：114-116 2009
- 3)岡崎裕子他：計画入院をする子供へのプレパレーションの効果の検討kobe Sity College of Nursinng 2008、23-29
- 4)奥山朝子：小児の採血場面におけるプレパレーションに関する文献検討 日本赤十字秋田短期大学紀要(1343-0033)12：83-88、2008
- 5)佐藤徳子他：採血・点滴処置時のプレパレーションを実施した看護師の気づき 第40回日本看護学会論文集 小児看護：9-11、2009
- 6)下山美樹他：幼児に対するプレパレーションを試みてJournal of Nagasaki Society nursing 6(1)：19-24、2010